しらはえのつき

2018年 夏会誌

奈良高専
現代視覚文化研究会

Modern Visual Culture Creator's Circle

まえがき

みなさん、お久しぶりです。現代視覚文化研究会、略して「現視研（げんしけん）」の会長のあっこどんです。このたびは、わざわざ夏会誌を読みに来てくださり、誠にありがとうございます。感謝感激雨あられにございます。

皆さんは、この夏はどんな風に過ごしますか？　お祭りや旅行？　それとも、海や川やプールなんかで思いっきり遊んじゃう？　気になるアノ子とデートとか!?

え？　私ですか？　多分そういうイベントがたいしてないまま終わるでしょうね～。第一、気になるアノ子とかいないですし。あ、でも秋会誌とか高専祭の展示物の準備とかは夏休みの間にしないとマズいから。それと勉強とその他もろもろで、夏休みが終わってしまうでしょうねぇ……。

皆さんご存知でしょうが、今年から夏休みが8月の中頃から9月末までになるので、今まで夏休みが終わって秋会誌の作品の締め切りが来て、編集担当が編集して製本！完成！という流れだったものが、今年はこの流れだと間に合わないかもしれない……というか間に合う気がしないので、間違いなく夏休み中に締め切りがやってくるんですよね……。展示したいものは個人で作って高専祭当日に持っていけばいいのですけど、会誌は輪転機を借りて印刷しないといけないから、色々と大変なのです……オノレェ

まあ、いつの間にか愚痴になっていますし、グダグダと長話をするのもアレですし正直めんどくさいでしょう。なので、まえがきはここまでとします。

ああ！　お客様！　お客様困ります！　これ以上話のネタがないんだろ！とか言わないでください！　事実だけど！　結構傷つく！　すごく傷つく！　こう見えて心が脆（もろ）いんです！　ガラスよりも脆いんです！　ああ！　お客様！　お客様困ります！　心を砕きに来ないでください！

……とんだしょうもない茶番を失礼しました。

ここまで読んでくださり、ありがとうございます。引き続き作品を楽しんでください。それでは！

心が脆いポンコツ会長

あっこどん

もくじ

小説

④ 死人に口なし、他者には手あり
——— えのぐふで

イラスト

⑦ あっこどん

⑧ 猫にゃん

表紙　シルフィイ
扉絵　猫にゃん あっこどん
編集　しゅう

小說作品

Novel

死人に口なし、他者には手あり

えのぐふで

医者に渡された紙を眺めて、私の手はフルフルと震えていた。以前、甥が池に飛び込んで寒さに震えていたが、あれよりも震えているのだろうという確信がある。

「すまないけれど、それが答えだよ。君の命は、もう助からない」

死の宣告。そんなものをまさか自分がされようとは夢にも思わなかった。

突如日本に現れた謎のウィルス。それに感染した人間は、何かしらの症状を発症する。しかし、それは人によって様々である。偉い学者様は、人の遺伝子によって姿形を変えて様々な症状を起こすと推察していた。

このウィルスは日本全国に及んだが、それによる症状のほぼ全てが軽いものだった。一日寝れば直るような風邪や、トイレに行けば良くなるような腹痛など、たいしたものではなかった。しかし今現在、このウィルスに冒された私は死の宣告をされている。どうやら感染者の中に三、四人ほど、私のような症状が確認されているらしい。そんな低い確率を引き当てた私は、今なら宝くじの一等を当てられる気がした。

「もってあと二週間というところかな。まだ身体的に異常は感じないだろうけど、そのうち体が動かなくなってくるだろう」

最後の思い出を作ってきなさいとでも言うかのように、先生は私に外出を促した。こんなにも複雑な気持ちになる優しさは初めて受けた。

そんなわけで私は外に出た。私は親も死に、姉弟もいない寂しい独り者なので、外にはなんの迎えもなかった。丁度やってきたバスに乗り、私はとある場所に向かった。

◇　◇

私は何の迷いもなく真っ先に、故郷にある海岸に向かった。

さて、ここで少し質問をしたい。もしもこの私を見ている人間がいるのなら、是非考えてもらいたい。

突然日本中に蔓延（まんえん）したウィルス。このウィルスの蔓延が止まる日が来たとして、それはきれいさっぱり人々の記憶から消えるだろうか？

答えは否である。きっとこのことは記録と記憶に刻まれ、後世まで語り継がれるだろう。

次に、そんなウィルスの感染者の中で、数人しかいない死亡者の名前は、他の感染者と何ら変わりなくとらえられるだろうか？

答えはまたもや否である。きっとそんな人間は良い意味でも悪い意味でも注目を浴びることになるだろう。

メディアというのは恐ろしいもので、少しでも影や形が見えてくれば容赦なく追ってくる。そして一番に恐ろしいのは、たどり着く先が真実とは限らないということだ。知らぬ間に私の趣味がゴリゴリのボーイズラブにでもなっているかもしれない。そんなのは本当に困る。死して余計な恥をさらしたいなど誰が思うだろうか？　誰も思わないだろう。

ならば、そういうことを避けるためにはどうすればいいのか？

答えはすぐに出た。下手に情報を得られる前に居なくなればいいのだ。そうなれば私の名前は残らない、というか残せないのだ。

さながらきれいに焼き切った雑草のように、跡形も残らず誰の目にも止らないような存在でいたい。

だから私は助走をしっかりとつけて、思い切り走った。そして広い海原にその身を放り投げた。

◇　◇

「あなたは自らの死を、誰かに知って欲しいと思いますか？　それとも、誰にも見向きもされることなく死んでいきたいと思いますか？　彼女は後者を選びました。誰とも関わりのない、孤独で寂しい彼女は後者でした。しかしこれは同時に、彼女が誰にも負担をかけなかったとも言えます。死は重い、非常に重いです。あなたが普段しっかりと感じることのできない命の重さは、その灯火が消えた瞬間にこそ感じることができます。さながら大きな岩のごとく、その重さはのしかかるでしょう。あなたには、そんな重さを預けられるだけの人がいるでしょうか？　本当の信頼というのは、死でこそ表せるのかもしれませんね」

「さて、水を差すようですが最後に残念なお知らせです。誰にも見つけられない、焼いた後の雑草のようになろうとした彼女でしたが、1つ大きな見誤りがありました。さあ、最終問題です、それは一体なんでしょう？」

「答えは簡単です。何かを焼くときって……大体煙が出るんですよ」

「あなたは他の煙とその煙、見分けってつきますか？」

◇　◇

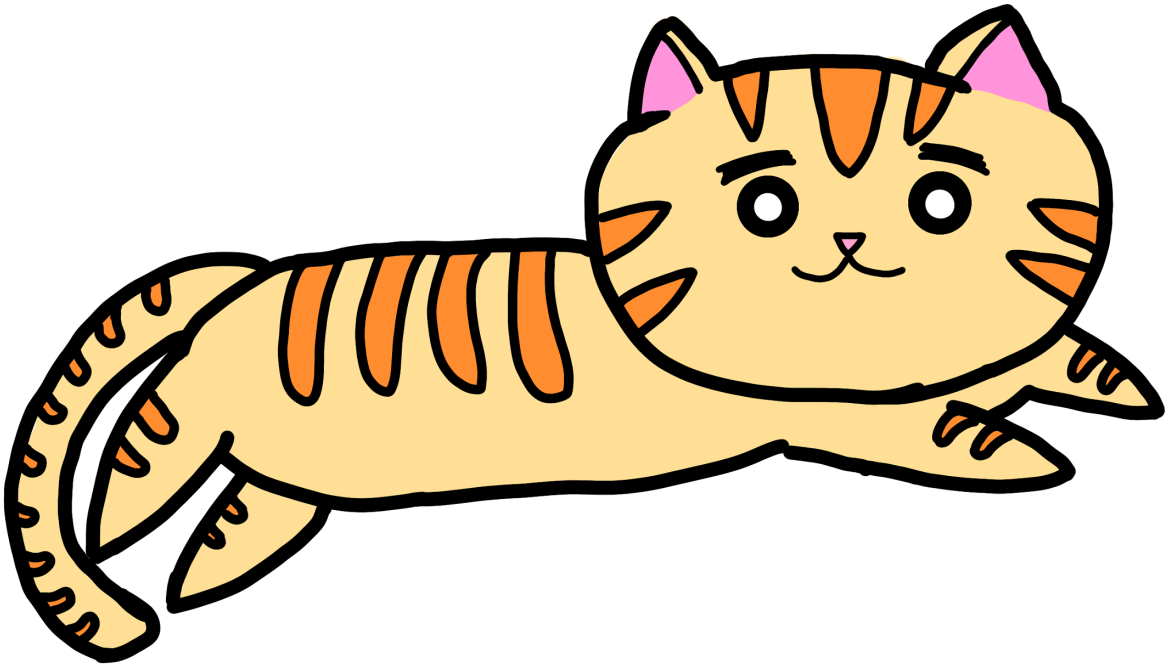
『……かつて日本を襲った超強力なウイルス。一部の感染者は自ら命を絶つという奇怪な行動に出たといわれています。』

『その症状の最初の確認例は、皆さんも一度は聞いたこともあるでしょう。〇〇さんです。この人の半生について、今日は特集を組んでお伝えします』

『さあ、まずはご家族からのメッセージをいただいておりますので、ご紹介させていただきます……』

了

イラスト作品



Akkodon

にゃん

あとがき

こんにちは。編集を担当させていただいた、しゅうです。現代視覚文化研究会の夏会誌『しらはえのつき』をお読み頂き、ありがとうございました。いかがだったでしょうか？

最近……暑いですね。過ごしやすい季節だった春もとっくに過ぎ、日々死にそうになりながら（比喩ではなく）生活しています。自然と垂れる汗に、季節が過ぎるのは早いなぁ、としみじみ感じてしまいます。

このくらいになれば、春会誌を受け取ってくださった1年生の方も、すでに奈良高専での生活に慣れていることでしょう。留年生は知りません。あの素晴らしい表紙が目印の春会誌を見て、入部とまではいかなくても、少しでも現視研に興味を持っていただければ幸いです。まあ、このあとがきまで読んでいただいている時点で、すでに興味はあるのだと思いますが。

さて、今年も現視研には、新入生がやってきました。その人数は4人と、例年よりも少ない気もしますが、いつも年を重ねるごとに人が減っていくので、ぜんぜん妥当な人数だと思います、ええ。

ゴールデンウィークには、某カラオケ店で恒例の新入生歓迎会も実施し、早くも私以上に部へ馴染(なじ)んでいるようで……。そのコミュニケーション能力が羨ましいかぎりです。

人が増えれば増えるだけ、活動も活発になるのは当たり前ですが、フレッシュピチピチの新入生含めた部員一同で、よりワイワイと創作をしていきたいと思います。特に、昨年は合作企画があまりなかったような気がするので、高専祭に向けたものなど、協力してなにかを創り上げるような企画をやりたいなぁ、と感じております。

……書くことがなくなってしまったので、そろそろ締めます。

改めて、夏会誌『しらはえのつき』をお読み頂き、ありがとうございました。

次は、文化の日にある高専祭でお会いすることになるでしょう。夏冬会誌と違いまして、紙媒体での頒布となります（ホームページ上でも公開します）。よろしければぜひ、足を運んでみてください。楽しいよ！

あと、ホームページでは過去の会誌や作品を公開しておりますので、ぜひご覧ください。また、Twitterアカウント（@nct_mvc3）もあります。フォローすると、もれなく、彼氏・彼女ができます!!うそです!!!!

ということで。ここまでお読み頂き、ありがとうございました。

それでは！

しゅう